

# 私の一冊

社会福祉学科 松井 順子 先生

門井 慶喜 著 『銀河鉄道の父』

小鹿図書館 913.6||Ka 14

この度、私がみなさんに紹介したい本は、童話作家・宮沢賢治の父である“宮沢政次郎”が、賢治誕生から息子を見送るまでの家族模様を、父の目を通して描かれた『銀河鉄道の父』という長編小説である。余談になるが、私は日本で初めて映画が一般上映された神戸で生まれ育った影響もあってか、幼い頃から映画好きで、この春、名優・役所広司・主演、宮沢賢治は若手人気俳優・菅田将暉が演じ、成島出監督で、直木賞受賞作『銀河鉄道の父』が上映されることを知り、その映画鑑賞で「宮沢賢治のイメージが変わった！」という感動からこの本を手に取り、読了に至った。なお、菅田将暉氏の宮沢賢治は、好演であったのは間違いない。

私はこの本・この映画に出会うまでは、「宮沢賢治は独特の感性で擬音語・擬態語を駆使する児童文学の天才、詩人であるが、生前は評価されることなく人生を閉じた苦勞人」で、「賢治の文学は私には難解！」という認識であった。確かに、生前はほとんど評価されず、結核で若くして旅立ったという理解は間違いないようである。しかし、幼い頃から食うに食わずの生活から、「雨ニモマケズ」の詩（人生最期の時期に書かれたメモ）が生まれたのではなく、家族の支え、特に父・政次郎の「父でありすぎる愛」を注がれ続けたからこそ、「ミンナニデクノボートヨバレ、ホメラレモセズ、クニモサレズ、ソウイモノニ、ワタシハナリタイ」という、無欲で信仰への帰依が成させたともいえる「雨ニモマケズ」を綴ることができたのではないか、そんな人物像を描くようになった。

賢治は6歳で赤痢に罹り入院するが、付き添い看病をしたのは母ではなく、父・政次郎である。その父・政次郎は、「商売人に学問は不要」という祖父の反対を説き伏せ、賢治の念願である岩手県立盛岡中学校への進学を許す。その後も、家業（質古着屋）を嫌い続ける賢治と親子喧嘩を繰り返しながらも、盛岡高等農林学校への進学を支え、人造鉱石を作るだの、信仰を日蓮宗に変えるだの（宮沢家は浄土真宗信仰）、農学校の教師になった後も自分の食い扶持すら家に入れぬ賢治を許し続けた明治生まれの父の姿に、私は驚きを禁じ得なかった。世間からみれば放蕩息子に過ぎぬ賢治を案じ、才能を信じ続けるには、それだけの財力と深い愛情の裏打ちなくしてあり得ない。賢治も、切り拓こうとしても歩みを進めることができない自分の人生に苦悩し負い目に感じていたことは、書物にも映画にも描かれている。そんな賢治を陰に日向に支え続けたのは、父・政次郎だけではなく、母・イチ、妹・トシ、弟・清六、妹・シゲ・クニの「あふれる家族愛」である。家長が絶対的な権限を持つ家制度が大手を振っていた時代、ましてや、岩手県花巻市という地方で、賢治はこれだけ豊かな愛情の中で育てられた。生きている間に家族の思いに応える評価を得られなかった賢治の無念さに思いを馳せると共に、賢治の独特な世界を文壇・読者が理解するには少し時間を要した・タイムラグがあったということであろうか。

文芸作品等の映画化は、書物が先か映画が先か、どちらか一方だけにすべきか、時折、議論されているが、私は自分のとつきが良い方から入れれば良いと、考えている。書物は作者と読者との対話を通じて、作者の描く世界を読者が理解する。小説等の映画化は、監督を中心にスタッフが原作をどのように理解し、視覚・聴覚を通じて観客に何を訴えたいのか、そして観客はどのようにとらえたか、ということではないかと思う。

この度、私は『銀河鉄道の父』という小説と映画の紹介を通じて、感受性豊かな若い学生のみなさんには幅広いジャンルの書物を読み、時には映画館に足を運び、スクリーンと対話する楽しさをぜひ、体感していただきたいということをお伝えして、本稿のまとめとしたい。